

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

126

2014. 7

- 2014 年度方針・計画 . . . P. 2
- 32 期研修生レポート . . . P. 6-7
- PHD 経由のひと . . . P. 9

PHD 運動とは 1962 年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの 10 パーセントをささげて、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981 年からはじまりました。

発行：公益財団法人 PHD 協会 理事長 今井鎮雄
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通 5-4-3
元町アーバンライフ 202
TEL：078-351-4892 FAX：078-351-4867
Email：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人 PHD 協会 01110-6-29688



インドネシア タラタジャラン村 撮影：T.SAKANISHI



久々の再開となった海外比較研修、インドネシアでの一コマ。

ネパールの人も、日本の人も一緒のゴトシロヨン (相互扶助)。環境保全や水資源の確保のために、一緒に植林を。

仕掛け人はタラタジャラン村のアルウィさんとマスラルさん。植林は村を挙げての活動。この日だけで40人以上の女性が参加。

研修生の帰国後の活動は地域に広がっていく…

2014 年度事業方針・計画

■ 方針

昨年度に引き続き安定的な運営を目指すとともに、研修生のフォローアップを通じて、成果の発現と視覚化に取り組みます。具体的には現在準備中である「PHD基金」という小さな資金を活用し、帰国後の研修生の活動を後押しします。また会費や寄付のご入金方法の多様化など、広く皆様にお支えいただける仕組みづくりにも着手します。

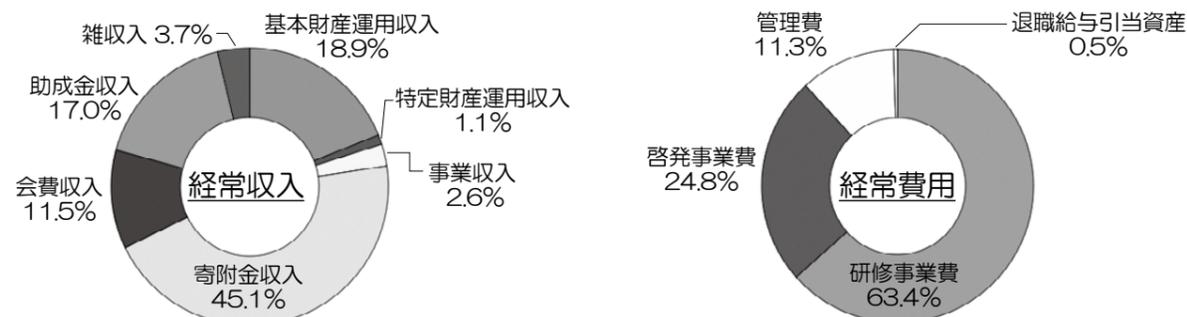
■ 研修事業 「保健衛生、保育、洋裁研修の充実」

PHD協会では「農業分野」や「保健衛生分野」の他に「保育分野」や「洋裁分野」の研修に力点を置いています。しかし近年、「農業」を除いて、「保健」「保育」「洋裁」の研修受入先は減少傾向にあるのが実情です。同時に、これらの分野に対する研修生たちからのニーズは高く、研修調整が難しくなっております。今年度はこれらの分野における研修受入先の新規開拓を目指し、研修事業の充実を図りたいと考えております。

■ 啓発事業

日本の人と研修生が出会う場づくりを軸とします。当会の活動への参加者が増えるよう会報、事業報告、ホームページなどの情報発信の質の向上をはかります。また、スタディツアー実施後にはツアー報告会を行い、今後のプログラムや活動への参加につなげます。

■ 2014 年度予算（経常収入 30,840,000 円、経常費用 30,840,000 円）



PHD 活動紹介 3月～6月末

- | | | |
|-----------|-----|---------------------------------|
| 3月 | 7日 | JICA関西 セミナー会議 (坂西・井上・工藤・吉川) |
| 1日 | 8日 | 聖和短期大学 礼拝 (井上) |
| | 13日 | JICA関西 PCM研修 (坂西・今里) ～ 14日 |
| | 15日 | 大阪堺ワイズメンズクラブ 例会 (今里) |
| 5日 | | 国際ソロプチミスト神戸 (坂西・今里・ムク・メラティ) |
| 6日 | 21日 | コープともしびボランティア振興財団 講演会 (坂西) |
| 8日 | 23日 | PHD協会 理事会 |
| 9日 | 24日 | 関西NGO協議会 総会 (坂西・工藤) |
| | 25日 | 青年海外協力隊兵庫県OB会 総会 (坂西) |
| 12日 | 29日 | 神戸学院大学 講義 (坂西・吉川) |
| 14日 | 31日 | 第32期研修生来日報告会 |
| 15日 | | 6月 |
| 16日 | 2日 | 神戸NGO協議会 定例会 (坂西・研修生3名) |
| 27日 | 3日 | PHD協会 評議員会 |
| | 4日 | 加古川平成ロータリークラブ 卓話 (坂西・研修生3名) |
| | 6日 | はらっば 総会 (坂西・今里・メラティ) |
| | 11日 | 神戸市シルバーカレッジ ボランティア活動報告会 (芳田) |
| | | 生協協同組合コープこうべ 総代会 (坂西) |
| | 14日 | スタディツアー合同説明会 (井上) |
| | 17日 | 神戸市地球環境市民会議 (坂西) |
| | 18日 | NGO相談員JICA推進員意見交換会 (坂西・井上) |
| | 20日 | 阪神シニアカレッジ 講義 (坂西・吉川・研修生3名) |
| | 21日 | 国際協力人材セミナー in 関西 NGO相談員として (井上) |
| | 26日 | NGO相談員 連絡会議 (坂西) ～ 27日 |
| 5月 | 28日 | 関西NGO協議会 インターン研修 (工藤・吉川) |
| 1日 | | ソディ例会 (芳田・吉川) |

PHD Movement vol.10

～分かち合い実践録～

事務局長 坂西卓郎

久々に再開の海外比較研修報告

31期研修生 海外比較研修旅行
 期間：3月12日～19日
 訪問先：インドネシア西スマトラ州
 タランバング

◆ 2008 年度以来の再開

当会では1986年から海外比較研修をフィリピンで行ってきた。その目的は「各々の風土のなかで各々がどのような知恵や工夫を考え出しているかを知らせ合うところに研修が相互交流を生み出す」(アジアの草の根国際交流 p.67)と草地前総事は述べている。



農業についてイ・日・ネで相互交流

しかし、財政難が主な理由で2008年度を最後に実施は見送ってきた。当会の財政事情は好転したとは言えないが、ここ2年は皆様のお支えもあり赤字を回避してきている。研修生の招へいのタイミングなども踏まえ「今しかない」と判断し再開に至った。

◆どこで実施するか？

ただ再開を決断したはいいが「どこで再開しようか」と悩んだ。以前のようにフィリピンもよいが、近年は職員が訪問できておらず事情がわからない。またフィリピンではSAFRUDIというNGOが地域支援をしており、「私の地域にはこんなNGOはない」という海外比較研修を受けた過去の研修生の感想を聞いたこともある。

最終的には草地前総事が指摘する

「相互交流」の実現のためにも、成功地域であるインドネシアを見てもらおうと決断した。その主な理由は、帰った研修生がチームワークよくがんばっていること、また特に支援をしてくれるグループがなくても独力で活動を展開している、という事実である。

同地域を見ることはモーママさんとプレムさんにとっては帰国後の活動のモデルとなるだろうし、ダリスマンさんにとっては帰国後の「あるもの探し」、つまり自分の地域が持つ力を再認識する機会になりえると考えたのである。

◆成功地域インドネシアから学ぶ

さて実際に海外比較研修を行ってどうだったのか？結果から言えば大きな成果を得ることができたと感じている。その要因としては、タベ村の幼稚園の成功例とその過程でのミミさん(02年度)たちの頑張りを聞くことができたことが挙げられる。

今では政府から資金援助を得て、立派な園舎を作り、西スマトラ州からも表彰されるに至ったタベ村の幼稚園。



ミミさん、エリさん(03年度)が作った幼稚園

しかし最初は「子どもたちを集めて散歩だけをした」と取り組みを語ってくれた。お金がなくても工夫してできるところから始め、実績を作ってから政府にも認めてもらっていったという話だった。またダスウィルさん(99年度)、アフダールさん(00年度)の男性陣も「保育は女性研修生の仕事」とそ

ぽを向かずに一緒に協力してきた歩みを語ってくれ、どのように協働しているのか学ぶことができた。

実は当初の予定ではタベ村の人たちが頑張ってきた水道普及事業から上記のような協働について感じてもらおうと思っていたのだが、タベ村の取り組みは豊富でどの角度からでも学びを得ることができる。改めてタベ村の研修生を尊敬した一コマだった。

◆一年間の総まとめの「ふりかえり」

この項では書ききれない程の充実した研修を終え、州都パダンに戻り最後のふりかえりを行った。現在PHD協会では研修後のふりかえりを重視している。ただ学ぶだけではなく、それをふりかえり、発話することでより記憶を定着させたり、その時は気づかなかった学びを引き出したり、他の人の感想を聞くことで刺激し合う、そして最終的には自分の地域でどのように生かすかを検討する場として機能している。

パダンでの夜は海外比較研修のふりかえりであり、一年の総ふりかえりでもあった。その場では印象的な言葉がいくつもあったが、その一つとしてモーママさんが「私たちはPHD家族だった」と言ってくれた。これには我が意を得たりという気分だった。

◆違いを乗り越えて生まれる絆

実は海外比較研修の実施にはいくつかの不安があった。その一つが「31期生とインドネシアの研修生はうまく交わることができるのか」ということであつた。実はイスラムへの固定観念はネパールでもミャンマーでも根強いらしい。実際に夏ごろにモーママさんに「ダリスマンさんとプレムさんの村、行けるならどっちに行きたい？」と聞くと、彼女は「プレムさんの村」と即答した。ピンタリ村の写真がきれい

だったこともあるらしいが、やはりイスラムのコミュニティに入ることに抵抗があった、怖かったとのことだった。そんな先入観がある中で、実際の交流はうまくいくのか、こちらでかなりお膳立てをしないと交流は進まないのではないか、という不安があった。

◆PHD大家族！



ミミ母との別れに号泣のモーママさん

しかし、それらは全くの杞憂に終わった。モーママさんはミミさんのことを「お母さん」と呼び、別れの際は二人で涙した。それは固定観念よりもPHD協会の同じ研修を受けた連帯感が勝ったのだと思う。当会が多くの人に支えられ30年以上の間紡いできた絆がそこにあった。宗教や国籍を超え、同じ草の根から平和と健康を願う人たちの絆、そして日本語という共通のツールもあり初対面にも関わらずその距離は一瞬でゼロとなった。



初対面なのにたちまち仲良しになったプレムさんとインドラさん（10年度）

個人的にはそれぞれの研修生同士の交流を見ていて大変感動的だった。まさに「PHD大家族」。そしてただの大家族ではなく、地域を良くするという

意思と能力を持った大家族である。なんと心強いことか。この輪が日本を含めたそれぞれの地域で広がることで、必ずやこの地球にポジティブな影響をもたらすと強く確信できたし、私もその一員であることに誇りを感じることができた。

この絆は岩村先生から始まり、何千何万もの方々が当会に想いを寄せてくれた結果である。改めて先人の方々の偉業に感謝するとともに、次世代へ引き継いでいかねばと思いを新たにした瞬間であった。改めてPHD協会に連なるすべての人に感謝したい。

◆ダスウィルさん落選！

前号の表紙でも紹介させていただいたダスウィルさんの選挙結果ですが、残念ながら落選となりました。

4月9日の投票日にダスウィルさんに連絡をしたところ「まだわからない」とのことでしたが、同時に「だめかもしれない」というコメントも。

その後、現地からは毎日のように情報が入っていたのですが、開票が遅れていてなかなかわからないとのこと。最終的には投票日から1週間ちょっと経過してから結果が出ましたが、前述のように残念な結果となりました。

ただダスウィルさんに励ましの電話をかけると「ダメでしたね。でも、私はこれからがんばりますよ」と力強く言ってくれました。

今回の選挙では貴重な財産である牛を売り払って立候補したダスウィルさん。どの候補も財産を投げ打って参加するため、落選後は精神的な病にかかる人も多いとか。そんな中、落選直後でも前を向いていたダスウィルさんの今後の展開に期待したいと思います。

モーママさんからの便り

◆「今は町みたい」

モーママさん、3月に帰国して4月には早速レポートをくれました。それ

によると「今、村は電気もらいました。村じゃなくて、町みたいになりましたよ。今、皆さんごはん作ります。薪じゃないよ」とのこと。

ミャンマーでは水力発電が中心ですが、そのほとんどは中国などの諸外国に売電しており、都市部以外では電気の普及はあまり進んでいないよう。ただ2011年の民政移管以降少しずつ国内でも普及つつあるようで、政府の供給と民間資本での供給があるようですが、モーママさんの地域は政府供給。モーママさんが「町みたい」と言うようにちょっとずつ便利になってきているようです。

ただ「電気もらうために木もないです。だから暑い」とも。ちなみにモーママさんはあまりの暑さに頭が痛くなってしまったとか。今後の変化についても研修生と話し合っていきたいです。

提唱者 温故知新 岩村昇語録

～10%を捧げる事は自分を救う～

私は確信します。「貴方も私も、自分の時間と知恵と知識と技能として富の10%を献げる事によって自分自身も新たになる」ことを。かくして自己改革を日常生活の中でできる事からはじめることによるのみ世界は平和になるのであります。

（出典：「1981年度国際ロータリー大会 プラジル・サンパウロでのメッセージ」より抜粋）



集計してみると2013年度は当会の事業に5,000名弱の方が関わっていただいた。有難い。その皆さんが常に生き生きと主体的であることにボランティアという行為が一方ではなく双方なものだと実感する。岩村先生の確信は今も健在である。（坂西）

第18期国内研修生のご紹介

これから1年、海外からの研修生とともに学びます。



プレゼンテーションの打ち合わせ中（JICA研修）

◆吉川美華さん

一步踏み出すことで

若い頃は、国際交流に興味があり、神戸港に入港する外国客船の歓迎をしたり、留学生を受け入れたり、ゴルフツアーの通訳をしたりしていました。その後、企業に勤めながら、休日等を利用して、偶然にご縁のあった国際協力団体でボランティアを始めました。たくさんの方のボランティアの方が、自分にできることを無理なく、笑顔で活動されている姿を見て、この世界に深くかかわりたいと考えるようになりました。昨年、実際にバングラデシュを訪問してから、その思いは確信に変わり、長年の夢であったこの世界で働くことの第一歩を国内研修生として踏み出しました。

割った卵をどうする？

研修期間中は、海外からの研修生との関わり合いの中から自分自身を振り返ること、PHD協会の運営や活動に積極的に参加すること、行く先々で出会う人々との一期一会を大切にすることを目標に設定し実践していきます。

「卵を割らなければ、オムレツはできない」と退路を断ってしまいましたので、オムレツを極めるのは奥深く難しいとしても、割った卵を料理する方法は自分で見つけられるよう、アンテナを張り巡らし、生活の中の小さな積み重ねを大切にしていきたいと思っています。どうぞよろしくお祈りします。

□ ■ 工藤さんが、吉川さんを紹介 ■ □

ずっと興味を持っていた世界に飛び込んで来られた吉川さん。毎日とても輝いています。研修の際、初めてのプレゼンテーションで緊張の私をよそに、「すご楽しい！」と余裕の笑顔。スタディーツアーは「はい、行きます！」とその場で即決。そのアクティブさに圧倒される日々です。

◆ 工藤成美さん

人と人のつながりが持つ力に惹かれて

大学時代に中国人留学生と交流する機会が多かったです。その頃ニュースでは冷め切った日中関係が連日報じられていたのですが、私たちの間には普段と変わらない友人関係がありました。このような体験を通じ、人と人の友好関係を通してアジアの平和のために役立ちたいの思いを抱くようになりました。その後大学院に進み、子どもの教育や健康のために取り組む国際協力NGOでインターンをしました。今春に学校を修了し、この先も草の根レベルの交流に関わる人生を送りたいと考えていたところPHD協会の存在を知り、その理念に魅力を感じて国内研修生に応募しました。

PHD協会での一年は・・・

一年間という短い研修期間ですが、主に二つのことについて学びたいと思っています。一つ目は、有機農業についてです。最先端技術に頼った大量生産・大量消費の現在の日本の暮らしは、いわゆる「途上国」で暮らす農民や労働者、また私たちの未来の世代にしわ寄せをもたらします。穏やかに暮らすための知恵を持った経験豊かな農家さんや、村の素朴な暮らしを知るアジアの研修生たちから、多くのことを吸収し実践していきたいと思っています。二つ目は、NGOの運営についてです。春先まで学生だった私にとって、単純な事務所での作業も貴重な経験です。

この一年間、日々学ばせていただけるこの環境に感謝しながら、NGO職員を志望する者としても、一人の人間としても成長していきたいです。どうぞよろしくお祈りいたします。

□ ■ 吉川さんが、工藤さんを紹介 ■ □

北海道生まれの彼女は、徐々に南下を進め、PHD協会に辿り着きました。ふんわりとした外見からは想像もつかない、溢れんばかりの知識とアイデアを持つ才女です。身振り手振りで会話をしますが、格闘技にも精通しておりますので、ご注意を。

32 期研修生レポート (今里拓哉)

各地での研修が始まりました

それぞれの紹介と研修したいこと・・・

ムク・マヤ・タマンさん

28歳・ネパール



ムクさんの家族

「向上心旺盛な女性リーダー」

ピンタリ村から招へいする2人目の研修生です。10歳と5歳の息子を持つ2児の母として家事をしながら、農作業や家畜の世話もし、更に仕立て屋として地域の女性や子どもたちの服を作っています。またお母さんグループで活動しており、女性の地位向上に取り組んでいます。研修希望内容も農業・保健・女性組合など多方面に及ぶ、関心多き研修生です。

■ 滞在家族

前田明子さん、千恵さん (高砂市)



研修したいこと

■ 女性の地位向上

「村での『お母さんグループ』や地域活動を通じて、女性の地位向上に努めています。そのために日本で同様の取組や活動を行う団体を通じて勉強し、村の女性グループの強化を図りたいです。」

■ 保健衛生

「村には病院や診療所はなく、医者もいません。よって病気予防のために母親たちが知るべき保健衛生が重要です。特に幼児の栄養や、体重年齢比など、子どもの健康について勉強したいと思います。」

■ 土壌改良

「お米をはじめ、トウモロコシや玉ねぎなど多品目を作り、また家畜も牛、ヤギ、鶏などを飼育しています。日本では特に土を元気にする方法を勉強したいです。」



ムクさんが役員を務める「お母さんグループ」の集まりの様子

「文化の違いで生活習慣や考え方が違うのは当然だと思います。日本の文化やしきたり等知ってもらうことは大切ですが、あまり押し付けにならないようにしたいと思っています。ネパール料理を作ってもらいました。美味しかったです。機会があれば、これからも料理をしてもらうつもりです。」

サントウンウーさん

通称サントウンさん

22歳・ミャンマー (ビルマ)



サントウンさんの家族

「マイペースで子どもに好かれる好青年」

ミャンマー第2の都市マンダレー近郊のタインシェ村から呼ぶ10人目の研修生です。5人家族で2人の妹を持つお兄さんです。

幼い頃から家の農業を手伝っており、米や野菜の他、仏花なども栽培しています。家畜は牛2頭に鶏約50羽を飼育しています。また村の学校では5歳児にビルマ語を教えるなど、若くして地域に根ざしており、日本での学びを村で活かしてくれる事を期待しています。

■ 滞在家族

葛原時寛さん、香織さん (神戸市垂水区)



研修したいこと

■ 有機物を活かした肥料作り

「村では農作物の栽培に化学肥料を使いません。大量に使用することは人体に悪影響を及ぼすと聞きます。村にある牛糞、鶏糞、落葉などを活用した有機肥料の作り方とその使用方法について学びたいです。」

■ 保育・就学前教育

「村ではお坊さんが運営する学校で5歳の子どもたちにビルマ語を教えています。この学校には他にも算数などの教科はありますが、音楽や体育などの情操教育はありません。子どもたちが楽しみながら学べる、より良い教育方法を勉強したいです。」

■ 米

「村では田んぼを耕す際に牛糞を入れ、稲が病気になると化学肥料を与え、虫がでると農薬を与えています。しかしそれで良いのかわかりません。色々なお米作りを勉強してみたいです。」



葉物野菜の収穫

「真面目で礼儀正しい青年です。食事面でも何も困りません。家族が増えてにぎやかになり、楽しいです。手伝いも良くしてくれます。」

PHD協会から初めてひとりで帰ってきた時に、違うバスに乗ってしまい、帰ってきませんでした。(数時間後) どうにかしてひとりで帰って来ましたが、本人はわりとケロっとしていました。」

メラティ・アフリダさん

36歳・インドネシア



メラティさんと息子さん

研修したいこと

■ 子どもの健康

「村ではポシアンドゥと呼ばれる母子保健活動で、子どもの体重測定や補助食の提供などのボランティアをしています。ポシアンドゥに通うお母さんたちの子育てをより良くサポートできるよう、子どもの栄養や育て方について勉強したいです。」

■ 洋裁

「洋裁はまだ未経験です。ミシンもまだ使ったことはありません。しかしタバアテ地域には仕立て屋がありません。過去の研修生たちのように服を作れるようになることにより、現金収入を得て、地域活動に取り組む経済的余裕を持てるようになりたい。」

■ 保育

「タバアテ地域には幼稚園や保育園がありません。保育研修を通じて学ぶことを、ポシアンドゥに通うお母さんたちに伝えたいと思います。」



ポシアンドゥで子どもの体重測定

「寂しがり屋の頑張り屋さん」

出身のタバ村は帰国した研修生たちの取組みにより生活環境が大きく改善している村ですが、その村内でも特に取り残されているタバアテ地域の出身です。10歳の娘と16歳の息子を持つお母さんです。

家族の話になるとすぐ涙ぐんでしまう、家族思いで寂しがり屋のお母さん。2人の子どもと離れてしまうにもかかわらず、2年連続研修生の選考にチャレンジし、研修生に選ばれました。諦めない強い気持ちの持ち主でもあります。

■ 滞在家族

山岡哲雄さん、真理子さん (神戸市西区)



「コミュニケーションをとるのに最初はとても時間がかかったため、近所の80才になる元保育園園長さんに話し相手をしてもらって、生き生きとして、張り切ってメラティさんに日本語を教えてくださいました。インドネシア人はとてもまじめで誠実で、日本人と似ていると思いました。」

日々是東奔西走

研修担当 今里拓哉

ネパールの次期招へい地域

3月、31期研修生プレムさんの帰国に同行し、ネパール出張を実施しました。主な目的としては2015年度研修生を招へいする候補地の視察。2015年度のネパール研修生の選考はプレムさん(13年度)とムクさん(14年度)の出身村であるピンタリ村では実施しない予定なので、この場をお借りしてその経緯を述べさせていただけたらと思います。

研修生選考に関する方針

当会では、一つの村や地域から複数人の研修生を招へいするようにしています。やはり、研修生一人だけでは日本での学びを村で活かすことは困難であり、同地域に複数の研修生がいることによって日本での学びが共有され、帰国した研修生同士が互いに力を合わせるにより、研修の学びが村内の人々に少しずつ広がることを期待してい

ます。

この方針の元、5人の研修生を招へいたガハテ村からは2012年度で一区切りとし、2013年度と2014年度はピンタリ村から招へいし、選ばれたのがプレムさんとムクさんでした。

ピンタリ村から3人目を招へいしない理由

ピンタリ村から研修生2人しか招へいしないことは、当初から予定していたことでした。ピンタリ村はその自給率の高さから一目置かれた村です。その理由は灌漑設備によって可能となったお米をはじめとする多品目の農作物だけでなく、その水力を活かした製粉機や水力発電、バイオガスなどの自然エネルギーにも及びます。また幹線道路から村までの車道を整備するなど、村人同士が強い結束力で結ばれています。このようにピンタリ村は周辺の村をはじめ、他地域の人々にとっても良いモデルとなりうると考え、今後の研修生のリーダー的存在となるプレムさんとムクさんの2人のみを招へいし、2015年度からはより生活改善のニーズが高い周辺の村から招へいする計画で進めました。

次期招へい候補地の視察

そしてこのたびの出張でピンタリ村周辺の6つの村を視察することができました。その結果、2015年度研修生の選考はピンタリ村の南に位置するタクレ村で実施する予定となりました。その主な理由は、ピンタリ村と同じようにタマン民族が多く住む村であることや、灌漑用水が整備されており農業研修での学びを活かせる環境にあることなどです。そして何よりも現地カウンターパート団体であるSAGUNの後押しがあることです。プレムさんとムクさんにはピンタリ村がより良い村になるよう取り組んでもらいつつ、タクレ村からの研修生たちとも協力してくれることを願っています。



タクレ村の灌漑水路



スリン、シーコーラブーム遺跡にて (2013.12 ©miki fukumoto)

以前

大学を卒業して“OL”の頃、PHD協会ではないが、ボランティアの世界に足を踏み入れ始めた。“援助”というコトバが議論されていた時代。1989年「アジア市民フォーラム」に参加し、風の学校の中田正一さんの主題講演を聞いた。「山での遭難の際、自分が人を助けていると思っていたが、実は他者が一緒にいてくれたから自分も助かっていたのだ」という話。「一方的に支援するのではなく、支援する側とされる側がお互い協力することで成り立つもの」と理解した。岩村先生のお考えの中にも、一方的でなく、助け・助けられるという関係があったと思う。そして、私はPHD協会が10周年の年に訳もわからず入った。

ユニバーサルとは何か？

2年目の西日本研修旅行で、ビルマ、インドネシア、スリランカの3か国4人の研修生と話した中で出てきた話題。たしか最後の夜で、かなり熱が入っていた。私は啓発担当だったので、研修生たちと過ごしそんな話でできたことが妙に嬉しかった。この4人は、それぞれ宗教も違っていたけど、それを越えて普遍的な、皆が共通して持っているもの、「ユニバーサルなものとは？」という話だった。それでいて現実離れた夢のような話だったとも記憶している。

PHD協会は“宗教色なし”ということだったが、研修生は各人、それぞれの言葉に

PHD経由のひと vol.2 ~松尾(小松)みちさん~

1991年4月~2000年3月まで当会の啓発担当職員でした。退職後は、お連れ合いさんとタイのスリンに移り、現在に至ります。

フツー → PHD協会 → ユニバーサル

宗教をもってやってくる。今、息子はスリンの地元の学校に通っている。社会科の教科書は「社会、宗教と文化」で、宗教についても学んでいる(タイの国教は仏教、私たちはキリスト教)。「どの宗教も、いい人になるように教えている」と教わる。

宗教が違うことでなく、宗教が目指す“同じところ”を説いている。自分より、なにか“大いなるもの”の存在。高慢になるのではなく、謙虚でいられるように…と私は考える。

つながりという働き方・役割

自分は特に何もできなかったけれど、事務所にいて、人の持っている専門を分けてもらい、そういういろんなことができる人たちを繋いでいく。また来られた人たちとともに過ごすひととき、その積み重ねで…。つまるところ、私は人と人のつながりの中で、何か形になりにくい、目に見えにくい、数字として表せないようなものを作ってきたのでは…と思う。

“PHD”とは、仕事でなく生き方

スリンに来てからの自分のメモにそう書いてあった。

言うだけでなくやってみせる、やっている姿を見せる。押しつけでなく、自分でやって、それを紹介、知ってもらおうというスタンス。

その昔、ボランティアさんたちと開発ゲームの会というものをやっていた。その時のテーマは『北風と太陽』の太陽のように働きかけようだった。やかましく言われると人は意固地になって却ってやってみようという気になれないもの。

“自分である”ということ

スリンに来て、初めは夫婦ふたりでの勝手気ままな“大いなる遊び”だったのが、2年経って周りの人との関わりやムラという環

境の中での心境の変化から、子どもを授かり、だんだんと目指すところや考えが変わってきた。

自分は何者かと自問し、自分の属する“社会”について考えるようになった。子どもが成長するにつれて、家庭(家族)から地域また友だち、学校、職場と広がっていく彼らの社会。また村から町、県、国から世界へと広がる。

私は今、奨学金支援の活動を手伝っている。その支援する子どもたちにもこの“社会”について伝えている。

また自分自身の子育ても“人づくり”だという当たり前のことに気がつく。自分(大人)にとって子育てとは、一番小さな“社会(家庭)”において、将来社会を担う人づくりをするという大切な役割。でも、その一番小さなところでの当たり前の役割を丁寧にする、これが日々意外と難しい。子どもに対してだけではなく、親(きょうだい)、自分の相手(配偶者)、パートナーなど、一番近いところでもしかり。その延長で、関わる子どもたちとも人とのつながりを丁寧に、一つ一つ作っていく。大げさに言うとそれが人格、人生となり、また(その人が)社会を作っていくことに繋がっていく…と思う。

今置かれた場所において、小さなことを、一つ一つ積み重ねていきたい。



スリンの「象の村」にてタイの研修生たちと(2002.4)

ロータリークラブが生み、育てて下さったPHD協会 ロータリー米山記念奨学会



井上会長より奨学金を頂くムクさん(篠山ロータリークラブ 6月17日)



大西会長とメラティさん(加古川ロータリークラブ 6月17日)

◆今年度のお世話クラブとカウンセラーの方々◆

- 明石北ロータリークラブ・兼古茂樹さん … サントウンウーさん
- 加古川ロータリークラブ・保地富夫さん … メラティ・アフリダさん
- 篠山ロータリークラブ・今井保晴さん … ムク・マヤ・タマンさん

2014年度研修生も米山記念奨学生として受入れて頂いております。篠山ロータリークラブでは昨年度に続きネパールからの研修生であるムクさんがお世話になっております。早々に今井カウンセラーに名刺を作ってください、その後の例会では初めての名刺交換をさせて頂きました。

メラティさんは加古川ロータリークラブでお世話頂いており、初例会では会場前で待って下さっていた保地カウンセラーに付き添って頂き「緊張します」と言いながらも、日本語できちんと自己紹介をさせて頂きました。

明石北ロータリークラブではミャン

マーからの研修生であるサントウンウーさんを受入れて頂いております。先日出席させて頂いた最終例会では、ミャンマーの民族衣装で出迎えて頂くなど、暖かく受入れて頂きました。

一年間お世話になりますどうぞよろしく願いいたします。(井上理子)



林会長とサントウンウーさん(明石北ロータリークラブ 6月18日)

日本の里から 里—その2 熊本県水俣市

澤井健太郎さん



澤井さん (大阪府豊中市のせんちゅうパルにて)

◆ 生まれ故郷 ◆

人口約 27,000 人、熊本県の最南端に位置する水俣市は、西側に海、東側は山に囲まれた風光明媚な土地です。平地が少なく、傾斜地でのミカン栽培や棚田、お茶の栽培をおこなっています。私はこの地で生まれ、6歳の時、父の仕事の関係で別の街へ引っ越しました。お盆や正月の度、祖父母に会いに帰省していましたが、中学、高校になると、水俣で起きた悲惨な歴史を知ることになり、年頃の私は生まれ故郷から遠ざかるようになりました。

◆ 再生 ◆

それから 10 年が経ち、社会人になった私は海外ボランティアの仕事を目指して、この地に農業体験のため再び訪れることになったのです。そこで起きた出来事、出会った人、感じた事がその後の人生に大きな影響を与えました。過去の教訓を活かし、環境に負荷をかけない暮らしがそこにはあり、街全体が環境モデル都市として復興の道を歩んでいました。

学生の時に植え付けられたモノクロの

西日本研修旅行で毎年研修生たちが訪れる、熊本県水俣市。研修生たちは、社会学習の一つとして水俣市の歴史と現状を学んでいます。

3年前、水俣周辺地域に暮らす若者たちが、業種を超えて自然発生的に集まり、「あばあこね」というグループができました。水俣の元気(食・自然・暮らし・文化など)をメンバー自らが知り、それらを水俣の内・外の方々に届け、伝えていきたいと活動しています。

今回は、「あばあこね」のメンバーである澤井さんが「水俣」を伝えます。

イメージは、透き通るような青い海と、生命力がみなぎる森、不知火海に沈む夕日のカラフルな水俣に生まれ変わっていたのです。それは地元を誇りに思い、前を進む方々とお会いすることで、見えてきた景色だったのかもしれない。

◆ 体感 ◆

私が農業体験をさせてもらった天の製茶園さんもその先駆者の一人でした。農薬や化学肥料を使用せず、お茶の栽培から加工、販売までされています。

体験初日、その日は田んぼの草取りでした。田んぼに入ることにすら初めてだったひよっこは、裸足で直に泥に触れた瞬間、風がぬけ、空気が馴染み、なんとも言えない心地よさを感じた事を今でも鮮明に覚えています。それはとても懐かしい感触で、もといた場所に帰ってきたような感覚でした。

作業後、園主である天野さんが「夕食の準備はするけん、ミミズばとってこね」と言いました。私はまさか日本でも奥地に行けば、こんな食文化があるのかと額に汗を滲ませましたが、すぐに魚釣りの餌に使う事が分かり、ほっと胸を撫

で下ろしたのを覚えています。

釣ったニジマスを囲炉裏で味わい、食後は離れの五右衛門風呂で紅茶風呂を用意してくれ、風呂上がりの夜は無数の流れ星で私を歓迎してくれているかのようでした。

◆ 世界を見て、地域で動く ◆

結局、私の海外ボランティアの夢は健康上の理由で断念せざるを得なくなりましたが、この地で農的な暮らしができるという環境がとても愛おしく感じたのです。現在は「みなまたオーガニックマーケット もじよか堂」という屋号で、水俣周辺で作られているこだわり野菜を販売し、小ロットでも業として成り立たせる為の流通ネットワークをつくる活動をしています。

TPPやグローバリゼーションなどの課題もありますが、地域で生きていく力を持つこと、次世代に引き継ぐ未来があることが大事だと思っています。

「世界を見て、地域で動く」地道な活動ではありますが、水俣のイメージを食で変えていこうとする人たちがいる町、それが我が水俣です。



棚田でのアイガモ米掛け干し風景



こだわり野菜を作る丸田有機農園さん



天の製茶園 草取りも手作業

「国ご飯・村ご飯」

vol.2 - インドネシア編 -



「村ご飯 (パダン料理)」

「飯はナシ、魚はイカン、菓子はクエ」スマトラを何度も訪れた、故渡邊喜太郎さんの十八番だ。カタカナはインドネシア語で語呂も良く覚えやすい。

パダン料理は辛さが有名で、レストランの配膳と勘定にも独特のスタイルを持つ。店へ入ると既にテーブルにはフィンガーボウルやナシ(ご飯)とコップに入ったアイル(水)が各自の席にあり、注文もしないのに次々と皿に盛られた料理が並ぶ。食べ方はフィンガーボウルで手を洗い、右手の指で料理を口に運ぶ。チャベ(唐辛子)や香辛料を混ぜたサンバルが効いた刺激のある味だ。さらに興味深かったのは支払方法だ。テーブルの皿から減った量を計算して請求される。つまり残したものは払わなくて良いわけだ。

インドから入ったムルタバも美味い。鉄板で焼いて造る四角い粉物だ。香辛料の効いた小鉢の汁につけて食べた。写真にはアヤムのサテ(鶏の串焼き)も横に並んでいる。

パサール(市場)では、円柱状のタフ(豆腐)もあった。テンペ(乾燥納豆)も、べたつかず食べやすい。チャベは小山を造って売られていたし、魚の干物やビニール袋に入ったパンもあった。果物ではピサン(バナナ)やナンカ(ジャックフルーツ)、マンゴスチンを見た。旧宗主国オランダを匂わせる料理とは出会えなかったが、アルファベットの読み方にオランダが残されていた。トイレ表記はWCだが、発音は「ウェーサー」だ。したがってPHDは「ペーハーデー」となる。

漁港のあるパシルパルーでは釣ったばかりの魚を見た。舌平目や鰹、鯛の仲間やエイは普通だが、珍しかったのはハンマーヘッド(撞木鮫)だ。どう調理する



オカズいっぱいパダン料理



左はサテ、右がムルタバ



パサールでチャベを売るオジサン



左は混ぜる前、右は混ぜた後のコピス



ナシチャンプル、ご飯を囲む多種のオカズ

研修生の出身国を代表するご飯、村でこそ食べることができる普段のご飯。1999年スタディツアーでスマトラを訪れた、桃骨さん(当会のボランティア)が紹介します。

のだらうと興味があった。その漁村の小さな喫茶店でコピス(練乳珈琲)を飲んだ。辛い食事の地域の飲み物は、概して甘い。スマトラもそうだった。ガラスコップに入った2色のコピスが登場した。コップの底から2cmは練乳の白、その上は珈琲が粉ごと混ぜた茶色だ。そこへ軽く砂糖を三杯は入れる。よくかき混ぜ暫くは粉の沈殿を待つ。あわてて飲むと多量の粉が口に入るので要注意だ。ゆったりとした気分で味わうコピスは捨てがたいものとなった。

「国ご飯」

ナシゴレン(焼き飯)やミーゴレン(焼きそば)は日本でも馴染みのある料理だ。ナシチャンプルには、多種のオカズがある。サテ・切ったテンペの甘い味噌和え・野菜の炒めもの・揚げ卵・生野菜・クルブツ(揚げせんべい)などが1枚の皿に盛られる。まるで日本の幕の内弁当のように、インドネシアの味を楽しめる。ガドガドは温野菜のピーナッツソースがけで、チュミチュミゴレンはイカの揚げ物だ。ゴレンは調理方法「揚げる」を意味する言葉で、他にルプス(ゆでる)やバカール(焼く)もある。

「酒」

イスラムの国だから酒は飲めないと思っていたが、町や村のレストランで、意外と容易に飲む事ができた。ビールが主で、バリハイ・ビンタン・アンカービールを飲み比べた。冷蔵庫のない店では、エス(氷)を浮かべたアジアスタイルだった。冷たくなるのを待ってから飲むことを忘れなければ問題はない。アラック(ヤシ酒)は残念ながら飲めなかった。アルコール度数の高い酒が好きな方は、こちらがお勧めだ。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2月	65件	¥657,606
3月	57件	¥782,681
4月	166件	¥1,334,927
5月	53件	¥517,705
341件		¥3,292,919

上記の通り多くの皆様より貴重なご浄財を賜りました。皆様のご協力に心より感謝を申し上げます。

◆NGO相談員平成26年度も受託しました



国際協力分野で経験と実績をもつ日本のNGOが外務省の委嘱で「NGO相談員」となり、NGOの国際協力活動、NGOの設立、組織の管理・運営など、市民やNGO関係者からの質問・照会に答える事業を平成26年度も受託しました。

国際協力への理解の促進のため、地方自治体や教育機関などと協力し、国際協力関係のイベント等において相談業務や講演を行う「出張サービス」も行っております。ぜひご活用ください。

◆使用済み切手・外貨コイン、募集中!

2013年度に皆さまからお寄せいただいた使用済み切手・外貨コインの換金額は、184,500円になりました。ご協力いただき、ありがとうございます。

換金相当額はPHD基金（帰国した研修生たちがグループで行う地域活動を応援する基金）として積み立てさせていただきます。他にも、書き損じハガキや未使用切手も集めています。今年度も皆さまのご協力をお願いいたします。



◆平成25年度NGO事業補助金報告

外務省国際協力局民間援助連携室が「NGOの事業実施能力や専門性の向上のため、NGO事業促進に資する活動を支援」という目的で実施する補助金を当会の研修事業に対して交付していただきました。

〇月×日のPHD協会



「昼休みの過ごし方」

国内研修生 工藤 昼休みは自作の弁当。現在は事務所のキッチン活用を検討中。PHDらしく、地域経済に貢献し、ごみを出さない取り組みを目指す!

国内研修生 吉川 昼休みはコーヒーの美味しい店を探してウロウロ。味だけでなく熱さや音楽も大事で現在も捜索中。一日一回飲まない中毒症状が?

職員 坂西 昼休みは基本妻が作ってくれる弁当で昼食。月水金は娘も同じ弁当。お弁当がないと大泣きする娘を思いながらほっこり。オチのない話。

職員 今里 なるだけ徒歩10分の自宅で妻子と昼食。しかしこれが忙しい。1歳のおてんば娘の相手です。ヘトヘト、急いで戻るのが常。仕事より大変?

職員 井上 昼休みは外食と弁当半々。外食の選択肢はたった二つ。南京町も近くにあるのに…。新規開拓が必要かと思うが、壁は500円しかない予算…。

職員 芳田 昼休みは基本外食。選択のポイントはご飯のお替り自由。昼はがっつり、夜は少な目で体重増を防ぐという方針。効果はまずまず。

事務所外での仕事・研修が多かった順
(5~7月の間)

編集後記

前号のPHD NEWSで「研修生が使うために、ご不用のデジタルカメラを」とお願いしたところ、5名の方からお寄せいただきました。お送り下さった方、お持ち下さった方、本当にありがとうございます。早速、使わせていただいております。(芳田)

編集協力：桃骨

新しい入金方法を導入しました

当会へのご寄附・会費のご入金に、三井住友銀行口座もご利用いただけるようになりました。

銀行名： 三井住友銀行
支店名： 神戸営業部
口座種類： 普通
口座番号： 3210568
名義人： 公益財団法人PHD協会

◎ お手数ですが、ご入金いただく前に、お名前、ご住所、電話番号、お振込み日、金額、入金種別（寄付または会費）を事務所までお知らせください。
◎ ゆうちょ銀行の振替口座もこれまで通りご利用いただけます。